

学会ホームページ <http://jasce.jp>

059号(2021年1月28日)

目次

2021年 年頭のご挨拶
名誉会員の推薦および承認について
「第2回オンライン協同学習カフェ」
報告
学会ワークショップについて
『協同と教育』への投稿募集中
各地の研究会・勉強会
出版情報
ショートレター(会員からの投稿記事)

2021年 年頭のご挨拶

あけましておめでとうございます。

会員の皆様におかれましては、健やかに新年をお迎えになられたこととお喜び申し上げます。皆様の教育と研究がさらに発展することを祈念いたします。

さて、昨年来のCOVID-19の感染拡大により、社会全体が誰も想像だにできなかった事態に陥り、教育現場は混乱を極めました。協同学習もかつてない試練に立たされています。協同学習では、学習仲間と場を共有し、互いの息づかいやぬくもりを間近に感じながら、学び合うことを当然と考えてきました。それを前提としていたと言っても過言ではありません。この三密をこよなく愛する協同学習をオンライン環境でいかに展開するか。私たちにとっては大きな課題となりました。

実は、このオンラインによる協同学習の実践の試みは、いまに始まったこ

とではありません。欧米では少なくとも15年以上もまえから、既に挑戦が始まっていたといえます。たとえば2005年に出版されたE. バークレイらの書籍(訳書「協同学習の技法」ナカニシヤ出版、2009年)では、協同学習の代表的な技法を30紹介しています。そのなかで、それぞれの技法について、オンライン授業の可能性を検討し、「高・中・低」の3段階で評価しています。いま思えば先見の明があったといえます。

しかしながら、わが国におけるオンラインによる協同学習の実践は大きく立ち遅れていたといえます。その原因として、わが国におけるインターネット環境の未整備や、オンラインによる協同学習の実践に耐えられるだけの通信技術が確立していなかったためと考えられます。このような状況下にあつて、COVID-19の感染拡大による突然のオンライン授業の要請に、協同学習の実践者は多くの困難を抱えることになりました。

そのなかにあつて同時双方向型のビデオ会議システムが協同学習に一条のひかりとなりました。このシステムを活用することにより、傾聴やミラーリング、シンク=ペア=シェアやラウンドロビンなど、協同学習を支える基本的なスキルや技法をオンラインでも実践可能になりました。対面場面と比べればまだまだシステムに改良の余地はありますが、曲がりなりにもオンラインによる協同学習が実現できる見通しが立っ

たのは大きな希望となりました。さらなる科学技術の展開が、より対面場面に近いオンライン環境を実現できるものと期待しています。

社会がCOVID-19を克服した後も、オンライン授業は続くと思います。これまでの経験を振り返り、さらに望ましいオンライン協同学習の実現を学会としても追求したいと考えています。学会が主催する今年の全国大会やワークショップもオンラインで開催することになります。学会としても新たな挑戦ですが、会員の皆様と一緒に心と力をあわせれば大きな成果をあげることができると信じています。まだまだ大変な日々が続きますが、一緒に頑張りましょう。

体調管理には呉々もご注意ください。

2021年元旦

日本協同教育学会会長 安永 悟

名誉会員の推薦および承認について

12月19日(土)にオンラインにより開催された日本協同教育学会理事会で、杉江修治先生、石田裕久先生が名誉会員として推薦され、理事の総意をもって承認されました。杉江先生、石田先生におかれては、永年にわたり日本の協同学習の発展に顕著な功績をあげられ、ならびに日本協同教育学会の設立期から今日に至るまで、本学会のために多大な貢献をされました。

誠にありがとうございます。

JASCE

【第2回オンライン協同学習カフェ】報告

2020年12月5日(土)13:00～16:30、第2回「オンライン協同学習カフェ」を開催しました(掲載写真)。参加申込みは会員33名・未会員18名の51名でした。

第I部の参加者は27名で、担当講師：水野正朗先生(東海学園大学准教授・本学会理事・ベーシックコーストレーナー)による「Zoomを使った協同学習の基本講習」として、傾聴、TPS、RRについて体験的に学びました。

第II部の参加者は51名で、話題提供は安永悟先生(久留米大学文学部教授・本学会会長)と久留米大学医学部の中村桂一郎先生、小松誠和先生、原樹先生でした。テーマは「LTD授業モデルによる科目『協同学習』の実践：2020年度前期の振り返り」で、LTD授業モデルに沿って展開された久留米大学医学部の初年次教育「協同学習」の対面時とオンライン時の授業展開方法、評価などについてご発表いただきました。

第III部は、基本講習で体験した協同学習の技法を使ったグループセッション&グループ活動の報告、話題提供者へのおたずねで進行し活発な意見交換がなされました。16:00からのオンライン情報交換会では、LTDからPBLへつないでいく際の工夫などについて、様々な角度から意見交換がなされました。

次回、第3回オンライン協同学習カフェの開催は、2021年3月6日(土)14時～16時の予定です。詳細については学会HPをご覧ください。皆様のご参加をお待ちしております。

問い合わせ先：研修委員会
(kenshu@jasce.jp)



第3回 オンライン協同学習カフェ
◆2021年3月6日(土)14時～16時◆
話題提供：織田 千賀子 先生
(藤田医科大学保健衛生学部看護学科)
テーマ：バーチャル体験と看図アプローチを活用した
成人看護学の学内実習展開の試み
日本協同教育学会 HP から申し込み(締切は2月27日)
カフェの詳細資料は申込みサイトをご参照ください。
参加費無料・学会員以外の方も参加可

学会ワークショップについて

今年度の学会主催ワークショップについては、当面中止といたします。ワークショップの性格上、濃厚接触のリスクが高い活動を伴いますので、苦渋の決断をいたしました。

ワークショップ再開の時期につきましては、研修委員会で慎重に検討の上、改めてご案内させていただきます。

なお、Zoomによる「オンライン協同学習カフェ」は、認定トレーナー養成を目的としないワークショップです。

協同学習の考え方と技法に習熟したい方や、オンライン授業で双方向的な学びをどう実現するかにお悩みの方にお勧めです。

『協同と教育』への投稿募集中

『協同と教育』への投稿を随時受け付けています。投稿受理から査読を経て採択が決定されるまでに通常数ヶ月以上を要します。学会機関誌『協同と教育』第16号は2021年3月発行の予定です。みなさまの積極的な投稿をお待ちしております。

各地の研究会・勉強会

(大阪地域)

協同学習を用いた看護教育研究会

◇新年明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願ひ申し上げます。

1月10日(日)にオンラインで開催しました(10:30～13:00)。関東、中部、関西、九州、沖縄などの地域から41名の方の参加があり、そのうち初参加の方が10名でした。

話題提供は、藤田医科大学の織田千賀子先生で「成人看護学実習(クリティカル)学内実習の試み～バーチャル体験と看図アプローチを活用した360データの読解～」の授業実践をご発表いただきました。参加者が「看図アプローチ」について理解した上で拝聴できるよう、最初に防衛医科大学の菊原美緒先生に「看図」

JASCE

についてミニレクチャーをしていただき、Google Jamboardをつかってグループ学習しました。佐賀大学の米満先生のサポートに感謝致します。最後に本授業における「評価」の視点や方法について意見交換しました。

従来、看護学生は臨地実習で実際の医療現場に入り、理論と体験を統合して各分野の看護学を学んできました。しかし、長引く深刻なコロナ禍により医療現場に入れない状況が続いています。そのような中、いかにリアルに近い教材づくりをして深い学びを実現できるか、教員たちは効果的な教育方法を模索しチャレンジし続けています。

同時に「協同学習」・「協同の精神」を見失い手放すことなく授業を展開していくことが大事です。今年も研究会の仲間と触発し合い学生のために自己の進化・深化に精進していきたいと思えます。

次回は、3月の開催を予定しています。

連絡先：緒方巧（梅花女子大学看護保健学部非常勤講師）
t-ogata@baika.ac.jp



(岡山・中国方面) 協同学習研究会

◇今年度第2回の協同学習研究会を12月5日（土）午後2時～5時30分にオンラインで開催しました。発表は東原猛流先生（瀬戸内市立牛窓西小学校）で、小学3年生の算数「円と球」の単元でした。26名のご参加を頂きました。進行は次の通りです。

1. Youtube Live による実践報告 (80分)
2. Zoom によるグループ協議と全体交流
 - 2-1 グループ協議1 (30分)
 - 2-2 グループ協議2 (20分)
3. 全体協議と質疑応答 (30分)
4. 閉会

東原先生は昨年に続き2回目のご発表でした。子ども主体の学習活動を組み立てたいという強い意欲と真摯な試行錯誤を重ねてくださっていました。しかしその思いの一方、学習者主体の活動に転換し切ることの難しさ

も共有できました。これは独り東原先生の課題ではありません。学習する集団、学習する主体への育ち実現するために、教師が基盤に据えるべき授業観とは何か、改めて問い直す機会となりました。当日は杉江修治先生にもご参加頂き、貴重な示唆を頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

第3回は2月27日（土）を予定しています。詳細が決まり次第、ご連絡します。

連絡先：高旗浩志（岡山大学教師教育開発センター）
takahata@okayama-u.ac.jp

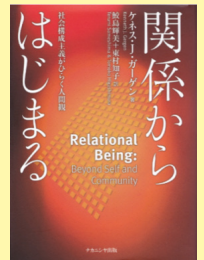


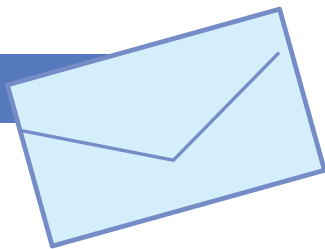
関係からはじまるー社会構成主義がひろく人間観

本書は社会構成主義の第一人者ケネス・J・ガーゲンによる“Relational Being: Beyond Self and Community”の翻訳書であり、その研究活動の集大成とも呼べる一冊です。すべては関係から生まれるという独自の関係論が、その理論的背景から教育や道德などの具体的実践に至るまで、多彩な文体を織り交ぜながら展開されます。近代的人間観が不可避に生み出す対立や争いを乗り越え、新たな未来を描き出すことが目指されています。

翻訳者 鮫島輝美・東村知子、ナカニシヤ出版。

● 出版情報 ●





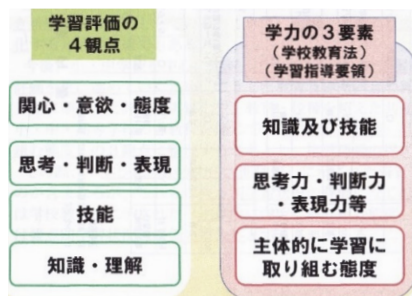
態度をどう理解し、どう評価するのか

文科省が「学習評価の4観点」を3観点に組み直しました。4観点の一つ「関心・意欲・態度」は「主体的に学習に取り組む態度」という表現になりました。

文科省は、現在の「関心・意欲・態度」の評価が、ノートの取り方や挙手の回数など、本来の意図とは違う指標を用いてきた実態に触れ、「子供たちが学びの見通しを持って、粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげるという、主体的な学びの過程の実現に向かっていくか」という観点」での評価なのだとして解説しています。

関心・意欲・態度が評価に組み込まれようとした折、日本教育心理学会でそれに関するシンポジウムが開かれました。そこでは、態度の概念も測定の方法も曖昧なものになぜ導入するのだという考えが主流でした。一方、学力としての態度面の重要性が理解されていたことも事実です。今回の改定は、学力としての態度を改めて位置付けたものといえます。ただ、できれば習得面とは別建てにして評価してほしいと思います。そうしないと、子どもや保護者にとって、教師からもらった数字の意味が正しく理解されないからです。

「主体的に学びに取り組む態度」の評価にはどんな意味があるのでしょうか。本来、子どもには成長意欲があるのです。そのかれらが学びに主体的に取り組む態度を見せないとしたら、



その原因は教師にかかってきます。子ども本来の姿を発揮させていないからです。子どもに、もっと良い学びの姿があるのだということを伝え、より熱心に学びに向かわせる手続きとして態度評価の結果を知らせることに意味があることは事実です。しかし、教師の指導の成否への情報提供の意味が強いように思えてなりません。

これまでの関心・意欲・態度の評価の物差しは、乱暴な言い方をすれば、「教師に対する態度」を評価していたのです。この機会に、態度評価の意味を、学校がしっかり捉え返す必要があります。評価の基本は観察によることになるでしょう。意欲につながる行動とは何か、これまでの経験を動員して、学校として観点づくりが求められます。

私が今思いつくのは、「自発的にメモをとる行動」「話題と教科書との照合を図る姿」「自分から辞書辞典を引く姿」「仲間の発言への傾聴」「仲間に伝えようとする発言の姿」などです。学習規律を、教師の授業のしやすさではなく、子どもの学習の視点でとら

え返すことが必要です。

授業後の子ども自身の振り返りも、教師に態度評価の情報をもたらします。例えば「学習内容の理解度、学習進歩の手応え」「学習内容への興味関心」「自分に必要な家庭学習への気づき」「仲間の意見の積極的な取入れ」など。理解度は、意欲があつてこそ生まれるものですから、学びへの積極的な態度があることをうかがうことのできる指標です。

アンケートによる評価も有意義だと思います。日常生活に学びが生きているかどうかです。読書習慣は国語などの学びを前向きに受け止めた態度形成を意味します。ニュースで社会に関心を持つことは社会科の、科学報告に関心を持つのは理科の学びへの態度形成の指標になります。

学びに向かう態度形成が可能な授業づくりを一貫させることが求められます。主体的、協同的な学びを追求する協同学習の理論を踏まえた授業実践は効果的だと考えます。学びの見通しが持てる導入、仲間とともに高め合うことで生じる協同の意欲づけ、「できたーできない」だけで学びを評価されない。努力や個人の中での進歩を大事にすることで味わえる成功体験の積み重ねがそこにあります。「主体的に学習に取り組む態度」という、評価の枠組みの変更は、関心・意欲・態度評価を有意義な実践につなぐ機会だといえます。

(中京大学名誉教授 杉江修治)